

農作物技術情報 第7号 水稻

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 県内全域で刈取り作業が進んでいます。刈遅れは着色粒や胴割粒、白未熟粒の混入率を高めるので、速やかに刈取りを終えましょう。
- ◆ 倒伏したほ場では、コンバイン等の作業速度を遅くし、刈分けにより品質確保に努めましょう。
- ◆ 胴割粒の発生防止のために、丁寧な乾燥を心掛けましょう。
- ◆ わらの分解を促進するため、秋の早い時期に稲わらのすき込みを行いましょう。
- ◆ 日没が早まる時期なので、無理をせず安全第一の農作業を心掛けましょう。

1 県内の刈取り進捗状況

- (1) 刈取り始期（10%）は、平年より9日早い9月14日頃と推定されます。
- (2) 9月18日現在、県全体の水田の21%で刈取りが終了しており、地帯別では、北上川上流23%、北上川下流19%、東部23%、北部27%となっています。

表1 県内水稻の刈取り状況（9月18日現在、各農業改良普及センター調査）

	進捗率(%)			本年(月/日)			平年(月/日)			平年差(日)
	本年	R6	R5	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期	始期
北上川上流	23	29	23	(9/13)			9/22	10/4	10/15	(-9)
北上川下流	19	27	21	9/15			9/23	10/2	10/12	-8
東部	23	42	27	9/14			9/22	10/1	10/13	-8
北部	27	22	19	(9/14)			9/26	10/5	10/17	(-12)
県全体	21	28	22	(9/14)			9/23	10/3	10/13	(-9)

- 1) 県全体…地帯別の水稻作付面積比による加重平均。
- 2) 刈取り時期…始期：10%、盛期：50%、終期：90% の水田で終了した日。
始期（括弧書き）は、9/18現在で未到達の市町村を含むため暫定値。
- 3) 平年…平成27年～令和6年の10ヵ年の平均値。

2 品質確保に向けた収穫対策

- (1) 現在ほとんどのほ場で刈取り時期を迎えています。刈遅れは着色粒や胴割粒、白未熟粒の混入率を高めるので、速やかに刈取りを行います。
- (2) 倒伏したほ場では、コンバイン等の作業速度を遅くし、丁寧に刈取ります。また、水口付近など、周り比べて生育等が著しく異なる部分は刈分けし、玄米品質の均質化に努めます。
- (3) 例年10月は台風の発生が多い時期です。台風接近前は農作業安全に留意しつつ、可能な限り刈取りを終えると同時に、通過後は速やかに作業開始できるよう、排水対策を徹底します。

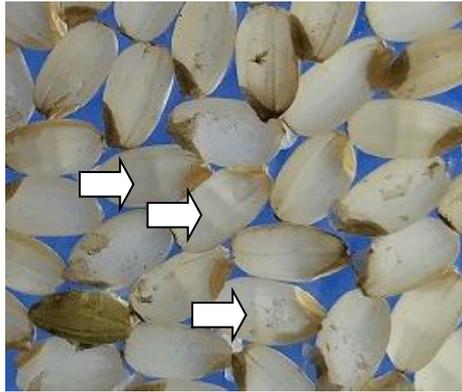


図1 胴割粒（矢印）



図2 乳白粒（矢印）

3 乾燥・調製の留意点

本年は出穂後10日間の最高気温が高く推移したため、胴割粒が発生しやすい登熟条件となっています。胴割粒の発生を防ぎ、玄米品質を確保するため、仕上げ水分15.0%以下を徹底し、丁寧な乾燥・調製を心掛けましょう。

具体的な留意点については、令和7年8月28日発行の「農作物技術情報第6号 水稻」を参照ください。

4 秋耕起（稲わらの腐熟促進）

- (1) 稲わらの秋すき込みは、春すき込みに比べわらの分解が進むため、入水後の「わき（硫化水素や温室効果ガスであるメタン）」の発生や窒素飢餓による水稻の生育抑制を軽減できます。わらの分解は、地温 15℃以上で促進されますので、秋の早い時期にすき込みできるよう、適期刈取りに努めましょう。
- (2) 稲わらの腐熟促進を図るための耕起は、5～8 cm 程度の浅耕とします。
- (3) 切りわら散布後、腐熟促進肥料（石灰窒素の場合、10a あたり現物 15～20kg）または家畜ふん堆肥（窒素換算で 5 kg/10a、発酵豚ふんや鶏ふんなど C/N 比が低いものが望ましい）を施用してすき込むことで、わらの分解が一層促進されます。
- (4) 湿田では、わらはい肥化して施用することが望ましいですが、困難な場合は稲わら等のすき込み後、排水溝の設置などにより地表水の排除に努めましょう。

5 農作業安全

日没が早まる時期です。夕方に事故の発生が多いので、計画的かつ慎重な作業を心がけます。

- ・ ほ場での移動、運搬の際の転倒事故や車の追突事故に注意しましょう。
- ・ コンバインにわら等が詰まった際は、必ずエンジンを止めてから作業を行いましょう。
- ・ 夜光反射材や低速車マークを取り付け、路上走行中の追突事故を防止しましょう。

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第7号 畑作物

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 大豆 葉の黄化が始まっています。ほ場観察をこまめに行い、成熟状況の確認、青立ち株や雑草の抜き取り、ほ場排水の徹底など、収穫作業に向けた準備を進めましょう。
- ◆ 小麦 小麦のは種適期を迎えています。適期を逃さず作業を行い、生育量の確保に努め、赤かび病に強い健全な小麦を生産しましょう。条件が整わずは種が遅れたほ場では、は種量を増やし、目標株立数の確保に努めましょう。

大豆

1 生育概況

子実肥大は概ね順調に進んでおり、葉の黄化が始まっています。

2 収穫作業の前に

(1) 台風対策

例年 10 月は台風の発生が多い時期となりますので、今後とも気象情報を確認し、状況に応じて排水対策など、事前事後対策を徹底してください。

(2) 雑草、青立ち株の抜き取り

アメリカセンダングサ、シロザ、ヨウシュヤマゴボウなどの大型雑草は、収穫時に汚損粒の発生や作業の妨げになるので取り除き、次作の発生源とならないよう種子をつけた雑草はほ場から搬出してください。

また、青立ち株も汚損粒の原因となりますので、雑草と同様に抜き取ってください。

(3) コンバインの清掃

収穫作業の前には必ず清掃点検を実施し、作業に支障が出ないか確認しておきます。

また、土をかみ込んだ時など、収穫作業中でもコンバインの清掃が必要となることがあるので、清掃のポイントを把握し、効率的に行えるようにしておきます。

(4) 乾燥・調製施設の確認

乾燥・調製施設を利用する場合には、その稼働計画について確認し、ほ場の様子を踏まえた上で、刈取りの順番、収穫機械やオペレーターの確保等、準備をすすめておきます。

3 収穫

(1) 成熟期の判断

適期収穫には、成熟期を正確に判断することが重要です。莢を振ってカラカラ音がするようになったら、ほ場内の数カ所で実際に莢をむいて確認し、次の2つから成熟期を判断します。

ア ほ場のほとんどの株で、大部分の莢が熟色になっている

イ 莢の中の子実が乾燥子実の形になっている

成熟期を確認したら、表1を参考に収穫作業に入ります。

表1 成熟期からコンバイン収穫適期までの日数

品種	成熟期からコンバイン収穫適期までの日数		収穫(適)期間
	早限	晩限	
ユキホマレ	7～10日後	20～25日後	10～18日
ナンブシロメ	10日後	20～25日後	10～15日
シュウリュウ	10日後	20日後	10日
リュウホウ	10日後	20日後	10日

※成熟後、「リュウホウ」はしわ粒が発生しやすく、「シュウリュウ」はやや裂莢しやすいので収穫適期になったら速やかに収穫します。

(2) コンバイン収穫のポイント

ア 収穫時の茎水分は50%以下

茎水分が50%を超えると、こぎ胴で茎がもまれて茎汁が発生し、汚損粒の原因となります。このため、青立ちした株は必ず抜き取ってください。茎水分50%以下の目安は、分枝が手でポキポキと折れるときです。

イ 収穫時の子実水分は18%以下

収穫時の子実水分は18%以下を目標とし、高くとも22%以下で収穫します。なお、子実水分が20%以上の場合は、つぶれ粒を主体とする損傷粒が多くなり、15%以下の場合は、裂傷や割れ豆などが多くなる傾向があります。

ウ 収穫の時間帯は茎葉がよく乾いた頃

晴れた日の場合、午前10時過ぎ～午後5時頃までが目安です。茎水分が高いため朝夕は避けてください。

4 乾燥

(1) 乾燥

子実水分が高いものを急速に乾燥させると、裂皮粒やしわ粒発生の原因となります。子実水分を均一に低下させるよう、子実水分18%までは急速な乾燥を避け、通風による予備乾燥(毎時乾減率0.5%程度)を行います。

(2) 被害粒発生のしくみ

被害粒のうち、裂皮粒(写真1)は、収穫前に、大豆の生理的な要因で種皮が部分的に裂けて生じるもの(例:莢数不足あるいは刈遅れによる過熟が発生)と、高温通風など乾燥調製時の急激な乾燥によって生じるものに大別されます。

しわ粒は、子実のへその反対側の子葉組織と種皮がギザギザになる「ちりめんじわ(写真2)」と、種皮が吸湿により亀甲状に隆起する「亀甲じわ(写真3)」に大別されます。

「ちりめんじわ」は主に、生育後半の地力の減耗や窒素吸収量の低下により発生するため、この時期の栄養状態の改善が対策となります。

「亀甲じわ」は子実形成から収穫期前後までの乾燥・吸湿の過程で、皮と子実の収縮・伸長の繰り返しが生じますので、刈遅れを避けることが対策につながります。



写真1 裂皮粒 (皮切れ粒) 写真2 しわ粒 (ちりめんじわ) 写真3 しわ粒 (亀甲じわ)

5 その他

(1) 紫斑病対策

成熟期以降、刈取りが遅れると紫斑粒が増加しますので、刈遅れを避けることが重要です。

また、ビーンカッターや手刈りで収穫した場合、速やかに脱穀・乾燥を行います。島立てやハウス乾燥中の刈株も、朝露や湿気などにより紫斑粒が徐々に増加することが知られています。

小麦

1 は種適期

は種期が遅くなると、年内に確保できる茎数が少なく、穂数不足による減収や、根張りが少ないため、凍上害にあうことが多くなります。

小麦も稲と同様に、主茎の葉齢によって発生する分げつ数が決まっており、越冬前の主茎葉齢は4葉以上、分げつは1～2本を確保することを目標にします。地帯別のは種適期を表2にまとめました。適期を逃さずは種作業を行い、越冬前に生育量を確保してください。

表2 県内の地帯別は種適期

地帯	は種期(月日)	
	早限	晩限
高標高地	9月15日	9月25日
県北部	9月15日	9月30日
県中部及び沿岸北部	9月20日	10月5日
県南部(沿岸南部)	9月25日	10月20日

ナンブコムギで発生しやすい縞萎縮病は、は種後30～40日間の気温が高く、降水量が多いと翌春の発病程度が高まります。このため、ナンブコムギをやむを得ず連作する場合、被害軽減のため、できるだけは種適期内の遅い時期には種してください。この場合、茎数確保のためは種量は標準の3割増しとします。ただし、適期を過ぎたは種は根張りが劣り、湿害や干ばつ害を受けやすくなりますので注意してください。

2 もしも適期を逃したら・・・は種時期が遅れたときの考え方

- (1) は種適期を守るのが基本ですが、ほ場条件が悪い場合、無理には種しても出芽不良を招きますので、その場合は作業を見合わせます。
- (2) 適期が過ぎてしまった場合は、各地帯のは種晩限から1週間遅れるごとには種量を1割ずつ増やし、目標出芽本数を確保できるよう努めます(表3)。

表3 品種別のは種量と目標出芽本数

品種名	は種量 (kg/10a)		目標出芽本数 (本/m ²)
	ドリルまき	全面全層まき	
ナンブコムギ	4～6	5～8	70～110
ゆきちから	6～8	8～10	120～160
銀河のちから	6～8	8～10	120～160
ナンブキラリ	6～8	8～10	110～150

3 基肥

麦類の施肥は、追肥の占める割合が高く、基肥は越冬前の生育量を確保するために施用します。

標準的な施肥量を表4に示していますが、土壤改良目標値を満たしたほ場での施肥管理は、「補給型施肥基準」を適用することができます。補給型施肥

とは、「ほ場からの収穫物による肥料分の持ち出し量」と浸透水による「土壌養分の溶脱量」を施肥によって補給する、という考え方を基に作られた施肥基準です。この施肥基準では、堆肥と化学肥料を区別することなく、含まれる肥料成分の合計で施肥設計しますので、堆肥の活用で肥料費を抑えることも可能です。詳しくは最寄りの農業改良普及センターにお問い合わせください。

表4 麦類の標準的な基肥量（成分 kg/10a）

窒素 (全域)	リン酸		カリ (全域)
	中南部 転換畑	中北部 普通畑	
4～6	10～15	15～20	10～12

※水田から転換して初年目、2年目の「ゆきちから」の基肥は、茎数確保のため窒素6kg/10aとする。

4 雑草防除

は種後は、必ず土壤処理剤を散布します。もし、降雨などでは種直後に散布できなかった場合は、小麦の出芽後でも使用できる除草剤がありますので、ほ場が乾いたら早めに散布を行ってください。

5 排水対策

ほ場内の明きよは、は種後に施工することも可能です。小麦を部分的に潰してしまいましたが、収量への影響はほとんどありません。



写真4 ほ場内小明きよの施工例

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第7号 野菜

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 台風対策 排水対策と施設の保守点検を万全にしましょう。
- ◆ 果菜類（施設） トマトでは保温などによる裂果防止、早朝換気によるゴーストスポットの発生防止、トマトキバガ対策の徹底に努めましょう。
- ◆ 果菜類（露地） キュウリホモプシス根腐病など重要病害の発生状況の確認（残さ診断）や振返りを行い、次年度へ向けた対策を検討しましょう。
- ◆ 葉茎菜類 雨よけほうれんそうは適切な温度管理と病害虫防除を徹底しましょう。
- ◆ 冬春野菜 寒じめほうれんそうは大雪への備えを万全にし、適期は種と適切な温度管理を徹底しましょう。促成アスパラガスは低温遭遇時間を目安にして根株の掘り取り時期を決めましょう。

1 生育概況

(1) 果菜類（施設）

- ・ きゅうり早熟長期作型は収穫終盤です。抑制作型の生育はおおむね順調です。病害虫では、ハダニ類、ウリノメイガ、オオタバコガが発生しています。
- ・ トマトは、雨よけ栽培の摘心が行われています。高温による花落ち段位が収穫期になっているため、収穫量は減少傾向です。病害虫では、葉かび病、すすかび病やコナジラミ類、オオタバコガ、トマトキバガの発生がみられます。
- ・ ピーマンの生育は、尻腐れ果の発生は減少しましたが、赤果の発生がみられています。病害虫では、斑点病やアブラムシ類、アザミウマ類、タバコガ類の発生が継続しています。

(2) 果菜類（露地）

- ・ きゅうりは、草勢低下により曲がり果などがみられています。病害虫では、べと病、炭疽病、褐斑病やウリノメイガ、オオタバコガが発生しています。
- ・ ピーマンの生育は、尻腐れ果は減少しましたが、ひび果、肥大遅れによる赤果の発生が多いです。病害虫では、斑点病、斑点細菌病、タバコガ類の発生が継続しています。

(3) 葉茎菜類

- ・ 雨よけほうれんそうの生育は、おおむね順調です。病害虫では、萎凋病、シロオビノメイガの発生がみられます。
- ・ 高冷地キャベツは降雨により生育が進み、複数作型の収穫時期となっており、高冷地レタスは一部で強雨の影響により葉の裂けや外葉の腐敗がみられます。病害虫では、キャベツではべと病、軟腐病、株腐病や黒斑病、アザミウマ類、オオタバコガ、レタスでは腐敗病や軟腐病、褐斑病、オオタバコガの発生がみられます。
- ・ ねぎの収穫作業はおおむね順調に進んでいます。病害虫では、軟腐病、黒斑病、葉枯病、アザミウマ類、ハモグリバエ類の発生がみられます。

2 技術対策

(1) 台風対策

例年 10 月は台風の発生が多い時期になります。気象情報を確認し、状況に応じて排水対策、施設の保守点検など、事前事後の対策を徹底してください。具体的な技術対策は以下のとおりです。

- ・ ほ場周囲の明きよの点検と排水口への接続状況を確認し、スムーズな排水に努めます。
- ・ ハウスバンドの締め直しやハウスピニールの破れ部分の補修を行います。
- ・ 収穫可能な果実は、台風前に収穫するようにします。
- ・ 被害後は、被害茎葉や被害果を除去し、予防的に防除を行います。

(2) 果菜類（施設）の管理

ア きゅうり

- ・ 早熟作型では、生育が終盤となるため生育状況や収穫終了時期に応じた管理を行います。
- ・ 抑制作型では、日照時間が短くなるとともに気温の低下に伴う結露などにより病害の発生が懸念されることから、ハウスを閉める時間が長くないよう注意します。

側枝は、2～3節で摘芯し、枝数や葉数を確保します（写真1）。



写真1 抑制きゅうりの整枝管理（例）

イ トマト

これからの時期は、既に着果している果実を確実に出荷に結び付けるために、裂果や病害の発生を防ぐことが重要です。

また、トマトキバガの発生が増加しているため対策を徹底してください。

- ・ 温度管理は、急激な気温の低下及び14℃以下にならないよう夜間の保温を行います。
- ・ かん水は、早朝の開始時間を遅らせます。気温や生育量に応じたかん水量の調整を行って根域の水分過剰を防ぎ、急激な吸水による裂果を防ぎます。
- ・ 湿度管理は、外気と施設内の気温差が無くなるように早朝にハウスサイドを開放し、果実表面への結露を防止します。果実表面の結露は、ゴーストスポットや裂果の発生を助長します。
- ・ 病害では、葉かび病や灰色かび病が発生しやすくなるので、防除を徹底してください。
- ・ トマトキバガ対策は、令和7年8月29日発行（岩手県病害虫防除所）の令和7年度農作物病害虫発生速報（No.14）を参考に、発生が疑われる場合は、最寄りの普及センターへ連絡し、発生種の確認を行い、耕種的防除や農薬散布による効果的な対策を実施してください。

ウ ピーマン

気温の低下とともに、果実の肥大が緩慢となりますので、夜間の保温による生育温度の確保に努めてください。

- ・ 最低気温が16℃以下にならないよう夜間の保温を行います。
- ・ 出荷規格に適さない果実は、早めに摘除し、収穫果の肥大を促します。
- ・ 湿度上昇による病害発生を低減するために、日中は少しでも換気を行いハウス内の空気を動かします。
- ・ 防除は、斑点病、灰色かび病、タバコガ類を中心に行います。

(3) 果菜類（露地）の管理

ア きゅうり

草勢の維持と病害虫対策の徹底により収穫期間の延長を図ります。

- ・ 強い摘芯は控え、アーチから飛び出した弱い芯を指先で摘む程度に行います。

- ・ 摘葉は病葉・古葉・黄化葉などを中心に行い、追肥は、栽培終了時期を見越して行います。
- ・ 防除は、農薬の使用回数（成分の総使用回数を含む）に注意し、薬剤を選択してください。
- ・ 収穫残さに付着している病原菌は、翌年の発生源となるので、栽培終了後は速やかにほ場外へ持ち出し、できる限りほ場に残さないように片付け、次年度に向け資材消毒を実施してください。
- ・ 栽培終了後、根をそのままにすると、キュウリホモプシス根腐病が増える可能性があるため、きゅうりの根は速やかに抜き取り、キュウリホモプシス根腐病（写真2）の発生の有無を確認してください。
- ・ 疑わしい症状が見られた場合や、次年度の作付けに不安がある場合は、最寄りの農業改良普及センターなどに連絡し、残さ診断を受けてください。



写真2 ホモプシス根腐病による根の状態
（左上：200倍に拡大 右：黒変症状）

イ ピーマン

この時期は、病害や腐敗果、赤果の発生が増加するおそれがあるので、防除や果実の選別を徹底してください。

- ・ 斑点病、斑点細菌病の防除を中心として、降雨前後に薬剤散布を行い、発生低減を図ります。
- ・ 腐敗の原因になるため、被害果（タバコガ類など）や傷果の選別を徹底します。
- ・ 赤果の混入防止のため、果実の色をしっかり確認します（写真3）。
- ・ 果実表面に水分がないよう、出荷時の果実は乾いた状態とします。



写真3 市場での赤果の混入状況

(4) 葉茎菜類の管理

ア 雨よけほうれんそう

- ・ 年内収穫に向け、もう1作は種することを検討します。低温伸長性の良い品種を選択し、ハウスのこまめな開閉などによる温度管理を適切に行います。
- ・ ハウスを閉める時間が長くなると、べと病の発生が多くなります。べと病抵抗性品種であっても、日中は換気に努めるとともに、予防防除を行ってください。
- ・ ホウレンソウケナガコナダニの被害が多くなる時期です。今年被害があったほ場では、土壌処理剤と茎葉散布剤を併用します。茎葉散布剤は薬液が芯葉まで届くように丁寧に散布してください。
- ・ シロオビノメイガの発生がみられます。幼虫は、初め芯葉の隙間に入り込んで見つけにくいので、注意して観察し、防除が遅れないようにしてください（写真4）。



写真4 シロオビノメイガによる食害

イ キャベツ・レタス

- ・ 県北高冷地の収穫は終盤です。病害により収穫できなかった株、使い終わったマルチを適切に処理します。

ウ ねぎ

台風などの降雨によりほ場作業が出来ない日も多くなるため、ゆとりのある作業計画により適期収穫に努めてください。

- ・ 10月収穫の最終培土は、収穫の30日前を目安に、軟白部の伸長肥大を確認しながら行います。
- ・ 薬剤防除は、例年の防除体系に加え、今年発生が多い黒斑病、葉枯病も考慮して行います。また、農薬散布は収穫前日数に注意して適正に行います。
- ・ 次年度に向け、収穫終了ほ場から土壌診断や堆肥の施用を行います。

(5) 冬春野菜の管理

ア 寒じめほうれんそう

- ・ 冬期間の大雪によるパイプハウスの倒壊を防止するため、寒じめほうれんそうを作付けするハウスは補強用支柱や筋交いを設置するなどの補強対策を講じます。また、作付けするハウスは1棟おきにして、作付けしないハウスはビニールを外し、除雪しやすい環境を整えます。
- ・ ハウス栽培では9月下旬～10月中旬がは種時期です。地域により気象条件が異なるので、品種特性に合わせて適期には種します。
- ・ は種後の温度管理は、過剰に保温すると生育が進みすぎ、温度が低すぎると生育が大幅に遅れます。本県の寒じめほうれんそうの収穫期間は12月～翌年2月となるので、生育ステージに応じた適切な温度管理を行ってください。

イ 促成アスパラガス

- ・ 気温の低下とともに、地下部への養分転流が進む時期です。台風による倒伏などで、茎葉が傷まないよう管理します。
- ・ 根株の極端な早掘りは伏せ込み後の収量低下につながるため、低温遭遇時間（5℃以下の積算遭遇時間90時間以上）を目安に、掘り取り時期を決定します。

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第7号 花き

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 共通 台風・強風に備え、ネットと支柱を点検、補強しましょう。
- ◆ りんどう 花腐菌核病や黒斑病、オオタバコガ、アブラムシ類等の防除を徹底しましょう。
定植ほ場や収穫後ほ場も病害虫防除を継続しましょう。
- ◆ 小ぎく 収穫後管理を適切に行い、健全な伏せ込み苗・株を確保しましょう。

りんどう

1 生育概況

彼岸需要期向けの晩生種は、概ね需要期出荷となりましたが、高温による開花遅延がみられ、一部の品種やほ場では彼岸後も出荷が続いています。

病害では、黒斑病の発生が多くなっています。花腐菌核病の胞子を飛散させる子実体（きのこ）の発生が始まり防除時期となっています。

害虫では、オオタバコガの発生が増えています。またハダニ類、リンドウホソハマキの発生が継続してみられています。

2 台風対策

例年 10 月は台風の発生が多い時期となりますので、今後とも気象情報を確認し状況に応じて排水対策、施設の保守点検など事前事後対策を徹底してください。技術対策の詳細については、7月14日発行の「号外 台風対策」を参照してください。

3 栽培管理

(1) 残花処理

収穫後ほ場の花蕾^{かいらい}が着いている部分の茎を折り取ります。この作業は、花腐菌核病やオオタバコガ、アブラムシ類、アザミウマ類の防除に特に有効です。

(2) 茎の除去（株の刈り払い）

刃物を使って茎の除去作業を行う場合は、ウイルス病の感染を防ぐため、完全に枯れてから行います。極晩生品種では、冬まで株元の茎が枯れずに残る場合がありますので、その際は枯れた部分まで刈り払い、翌春に残った茎を除去します。

手作業で行う場合も、枯れていない茎を無理やり株元から折り取ると株を傷める可能性がありますので、折り取りやすい位置で除去し、残茎は翌春に除去します。

また、除去した茎は病害虫の越冬場所となることがあるため、ほ場内に放置せず、必ずほ場外で処分します。特に、ハダニ類やリンドウホソハマキの発生が多かったほ場では、枯れ茎の処分を徹底します。

(3) 除草

秋の除草が翌春の雑草の発生程度に大きく影響します。ほ場周囲も含めて除草を行います。

4 病害虫防除

今後も注意が必要な病害虫は、病害では花腐菌核病、黒斑病、葉枯病、害虫ではオオタバコガ、アブラムシ類となりますので継続して防除を行います。

花腐菌核病は、胞子を飛散させる子実体(きのこ)の発生が始まり、防除開始時期となっています。胞子飛散時期に降雨があると花蕾に感染します。今後開花する晩生種や極晩生品種では薬剤防除を行います。また、発病した部位を放置すると、菌核が形成され地面に落ち、来年の発生源になります。発病茎は開花期間中に折り取り、ほ場外に持出し処分します。

アブラムシ類は、気温の低下に伴い花から越冬芽周辺に移動してきますので、薬剤散布は株元にもしっかりと薬液がかかるようにします。

併せて、収穫が終了したほ場や今年新植したほ場の防除も継続して行います。



写真1 株元に形成された子実体(きのこ)
(傘の直径は大きいもので5mm程度)



写真2 越冬芽周辺に寄生したアブラムシ類

小ぎく

1 生育概況

9月咲き品種は、高温による開花遅延がみられ、彼岸需要期以降に開花となる品種もみられました。病害虫では、オオタバコガの発生が増えています。また、ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類の発生が継続してみられています。白さび病の発生は少なくなっています。

2 台風対策

りんどうと同様に事前・事後対策を行います。

3 栽培管理

(1) 収穫後管理

花遅伏せ込みに利用する株は、収穫後に地上部が伸びすぎないように地際5~10cmのところまで刈り込みをします。その後、速効性の化成肥料を窒素成分量で3kg/10a程度施用します。マルチ栽培では、刈り込みに後マルチを除去して土寄せし、生育を促すのが基本ですが、除草労力を考慮して決めます。

なお、かき芽で伏せ込む場合は、刈り込みに後発生した側枝に土寄せをして側枝の発根を促します。

(2) かき芽苗伏せ込み

株元から発生した側芽(かき芽)を利用して伏せ込む場合は、冬至芽や株伏せ込みよりも早く作業を行います。元株から発根したかき芽を採りますが、株に病害虫の発生がないことを必ず確認します。特に、本畑で白さび病またはべと病が発生した場合は、細心の注意を払います。準備するかき芽苗の本数は、定植予定株数の2～3割とします。



写真3 株からかき取ったかき芽苗

(3) 伏せ込み床の準備

かき芽苗で伏せ込む場合、作業が遅くなるほど活着も遅れますので、速やかに伏せ込み床を準備します。排水の悪いハウスでは、平畝ではなく10～15cm程度の高畝とします。

なお、長年の伏せ込み床使用によって肥料成分が土壌中に過剰蓄積(塩類集積)し、根が障害を起こして生育不良となる事例がみられます。このような状況が確認される場合は、積極的に土壌診断を受診して処方箋に基づいた適正施肥を行います。



写真4 塩類集積による伏せ込み株の生育不良

(4) 伏せ込み床の準備

この時期、収穫後の株元から伸長した茎が再び開花して、そこにアブラムシ類やアザミウマ類が多発する事例がみられます。伏せ込み作業まで期間がある場合は、過繁茂対策を兼ねて地際から20cm程度を残し着花部分を中心に台刈りします。刈り取った茎葉はほ場内に放置せず、必ずほ場外で処分します。

4 病害虫防除

伏せ込み株からハウス内に病害虫を持ち込まないように、収穫終了後も伏せ込みまでは継続して白さび病、アブラムシ類、アザミウマ類などの防除を実施します。

次号は10月30日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第7号 果樹

発行日 令和7年9月25日
 発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
 編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
 パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

◆ りんご 向こう1か月の気温も高い予報であることから、過度に着色を期待せず食味を重視し、すぐりもぎを徹底しましょう。

1 生育概況

(1) 果実生育（表1）

9月1日時点の生育診断ほの果実生育（横径、県平均）は、平年比で「ジョナゴールド」が95%、「ふじ」が99%です。6月から7月は少雨で経過しましたが、8月から9月にかけて降雨があり、果実の肥大はやや回復傾向にあります。

(2) 果実品質（図1～3）

9月21日時点の「ジョナゴールド」の果実品質（県平均）は、概ね平年並みです（図1～3）。

仙台管区气象台発表の1か月予報（9/18発表）では、向こう1か月の気温も高い予報のため、果肉先行となる可能性があります。引き続き、最新の気象情報と各普及センターやJA等が提示する情報を確認し、適期収穫に努めるとともに、過度に着色を期待せず食味を重視し、採り遅れないようにしてください。

表1 生育診断ほにおける果実生育(横径)状況(9月1日現在)

単位:mm

市町村	ジョナゴールド					ふじ				
	本年 (R7)	平年	比	前年 (R6)	比	本年 (R7)	平年	比	前年 (R6)	比
岩手県農業研究センター	85.8	84.8	101%	90.1	95%	77.4	78.7	98%	80.8	96%
盛岡市三ツ割	79.7	83.2	96%	86.3	92%	70.7	77.4	91%	78.8	90%
花巻市石鳥谷 ^{※2}	80.1	83.5	96%	84.0	95%	76.4	76.1	100%	81.2	94%
奥州市江刺樽輪	69.3	80.2	86%	74.0	94%	68.5	76.3	90%	72.6	94%
一関市狐禅寺 ^{※3}	82.3	83.5	99%	82.2	100%	75.9	75.6	100%	75.6	100%
陸前高田市米崎	82.5	83.4	99%	85.0	97%	78.8	77.1	102%	76.2	103%
宮古市崎山	-	-	-	-	-	84.3	79.5	106%	88.9	95%
二戸市金田一	80.9	83.9	96%	84.6	96%	81.2	79.2	103%	86.3	94%
県平均値 ^{※1} (参考)	79.1	83.0	95%	82.7	96%	76.5	77.3	99%	79.9	96%

※1 県平均値に農研センターのデータは含まれていない。

※2 R4年度より定点が変更となったため、平年値は花巻市上根子(前定点)の値を使用。

※3 R2年度より定点が変更となったため、平年値は一関市花泉(前定点)の値を使用。

※4 平年値は昭和60年～令和6年の平均
(地点変更時はその年次からの平均)

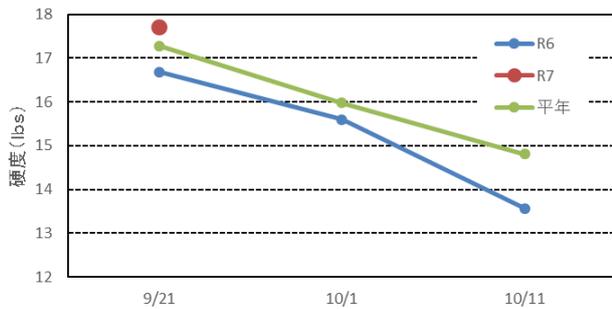


図1 ジョナゴールドの硬度の経時変化(県平均)



図2 ジョナゴールドの糖度の経時変化(県平均)



図3 ジョナゴールドのデンプン指数の経時変化(県平均)

表2 中生・晩生種の収穫期における果実品質の目安

品種	硬度 (lbs)	糖度 (%)	ヨードでんぷん反応指数	備考
ジョナゴールド	13以上	13以上	2~3	
王林	14以上	14以上	-	
シナゴールド	15程度	15以上	1以上 1以下	越年販売 年内販売
ふじ	14以上	14以上	1~2	

2 栽培管理のポイント

(1) 中生種の管理

ア 「ジョナゴールド」などの中生種の着色管理は、1回目の軽い葉摘み終了後、陽光面の着色が進んでから、葉や枝カゲをつくらないように玉回しを収穫まで2~3回行い、さらに、玉回しと同時に適当な強さで葉を摘みます。

イ りんごの着色適温は10~20℃であり、気温の高い日が続くと、必要以上に葉摘みを強くしても着色は進まないため、過度の葉摘みにならないよう注意します。

ウ 「ジョナゴールド」は着色が不ぞろいとなりやすいので、すぐりもぎが必要です。そのため、着色の進みに応じて葉摘みを行い、玉まわしはすぐりもぎの時にも行う等、回数をできるだけ多くすることが重要です。

エ 「ジョナゴールド」は収穫が遅れると果肉の軟化、果皮の油上がりが発生して、販売上不利になりますので、適期収穫を心がけてください(表2)。

オ 夏秋期に高温となる年は、収穫前落果が助長されることがあります。過去に収穫前落果が発生した品種については、落果防止剤の散布を検討し、品種・園地ごとに発生実態を把握したうえで、散布の可否を判断します。

なお、落果防止剤の散布により、収穫期の前進化や果実硬度の低下が想定されるため、使用の判断にあたっては、集出荷・販売の対応も併せて検討してください。

(2) 「ふじ」の着色管理

ア 「ふじ」は、着色期間が30~40日間と長いため、陽光面が着色してきた頃(9月下~10月上旬)と、10月中~下旬の2回に分けて葉摘みを行います。1回目の葉摘みは、果実に密着する葉を摘む程度とし、2回目は適当な強さまで葉を摘み、陽光面の着色が進んできたら葉や枝カゲを残さないよう玉回しを行います。

イ 過度の葉摘みは、葉が少なくなると果実の着色やみつ入りが劣り、翌年の花芽の充実が悪くなるなどマイナスの影響が出ますので注意してください(表3)。

表3 ふじの摘葉が果実品質に及ぼす影響

(青森りんご試 S61)

処理区分	果周増加量(mm)	糖度(%)	蜜の発生(%)	表面色	翌年の開花率(%)
全葉の摘葉	0.74	13.6	0	3	25.0
新梢葉摘葉	3.60	14.5	31	3	58.4
果そう葉摘葉	6.85	14.9	77	4	65.1
無摘葉	7.40	14.9	86	4	66.6

(摘要)摘葉処理は10月3日～10日に行った。果周増加は10月11日～11月11日までの分。

(3) 「シナノゴールド」の収穫

- ア 年内販売の場合は、表2の収穫時期を目安に、果面にワックスが感じられるようになり、デンプン指数が1以下になったことを確認して収穫してください。
- イ 越年販売の場合は、デンプンが若干残っている状態で収穫することで、収穫後約4ヶ月の貯蔵が可能となります。ただし、早く収穫するとやけ病が多くなり、遅く収穫すると貯蔵して4～5ヶ月ころから内部褐変が見られる場合がありますので、注意してください。

(4) お礼肥の施用

樹の衰弱がみられる場合には、早生・中生種では9月下旬以降、晩生種では10月中下旬以降からそれぞれ落葉までに施肥を実施します。施肥量は、成木で多くても10a当たり窒素成分5kgを目安としてください。

(5) 病害虫防除

黒星病や褐斑病の発病葉は、翌年の伝染源となるため、葉摘み作業等の際に見つけ次第摘み取り、黒星病の罹病果も含め土中に埋没させるか焼却するなどして処分してください。また、炭疽病や輪紋病など果実腐敗病についても、同様に適正に処分します。

3 気象災害対策

(1) 台風対策

強風で倒木が発生しないよう、防風ネットの設置、支柱との結束を確認してください。また、気象情報に注意し、場合によっては台風の接近前に収穫可能な品種は収穫を進めるなど、被害を最小限にする対策をとってください。

(2) 湿害対策

台風に伴う大雨や秋の長雨など、園地内の過湿は、裂果や根部の障害による樹勢衰弱の要因となります。園地内に水が停滞しないよう、溝を掘るなど排水対策を実施します。

次号は10月30日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。	
9月15日～11月15日は 秋の農作業安全月間です	忘れずに！点検・確認・安全管理 無事故で終える収穫作業
農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。	

農作物技術情報 第7号 畜産

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 飼料用とうもろこし 収穫最盛期を迎えています。切断長、踏圧密度に留意して、安全に収穫調整を行いましょう。
- ◆ 牧草 オーチャードグラスは刈取危険帯を避けて秋施肥を行い、翌春の収量確保のための分けつを促しましょう。
- ◆ 大家畜 牛の蹄を観察して、体調管理に役立てましょう。子牛の寒冷対策を始めましょう。

1 飼料用とうもろこし

(1) 生育状況

7月の干ばつにより、子実の充実や茎葉の生育停滞が心配されましたが、8月の降雨により、子実、茎葉の生育も平年並みとなってきました。水分の減少が緩慢な傾向にありますが、黄熟期を迎えており、収穫が始まっています。

(2) 収穫の留意点

子実が黄熟期に達し水分が50%程度、全体の水分が70%程度になると収穫適期です。

家畜の消化率とサイロへの詰込み密度を高めるため、収穫時の切断長を10mm未満とします。コーンクラッシャーによる破碎処理を行う場合は、切断長を19mm、ローラーの間隙を黄熟期5mm、黄熟期以降は3mmとします。

過度の刈り遅れやすす紋病等の病害発生、霜にあたったとうもろこしは、水分含量が低く、貯蔵期間中のカビの発生やサイレージの開封後に好気的変敗が起こりやすくなります。このような場合は、ギ酸やプロピオン酸など添加剤の使用を検討します。強風等により倒伏した場合は、作業機の走行速度を遅くし、倒れた方向に対して斜め後ろから進入します。また、高刈りして土壌の混入を避け、十分な踏圧と早期密封に努め、発酵品質の低下を防ぎます。

2 牧草

(1) 生育状況

7月の少雨により、一部ほ場で夏枯れや生育の停滞がみられましたが、8月の降雨により回復しつつあります。

収穫は8月下旬から始まっていますが、収量はやや不良から例年並みの見込みです。

(2) 寒地型牧草の秋の管理

気温が低下してくると、牧草は越冬のために茎葉基部（刈株）などに養分を蓄積します。この時期に施肥や刈取りを行うと、越冬のための養分が不足し翌年の1番草が減収するので、刈取危険帯を避けて刈取り等を行います（表1）。

(3) オーチャードグラスの秋施肥

オーチャードグラスは、秋に新分けつを旺盛に発生させるため、秋の最終刈取後に窒素で4kg/10aを上限に追肥して翌年の1番草の収量を確保します。この場合は、(2)の刈取危険帯よりも前に追肥します。

なお、チモシーは、1番草刈取後に分けつを旺盛に発生させるため、秋の追肥は効果がありません。

表1 地域別の刈取危険帯の目安（2023～2024年の2か年平均）

	刈取危険帯* の目安	参考
		平均気温が5℃以下となる日 (気象庁データより)
奥中山	10月上旬～11月上旬	11月8日
盛岡	10月中旬～11月中旬	11月20日
久慈	10月中旬～11月中旬	11月12日
江刺	10月下旬～11月下旬	11月25日
一関	10月下旬～11月下旬	11月25日

※生育停止点（平均気温が5℃以下になる日）から遡った約30日間

3 牛の飼養管理

秋になり、夏バテの症状が深刻になる場合があります。牛群をよく観察し、疾病の予兆を早めに見つけ適切に処置します。

暑熱対策も継続し、体内に熱が籠らないように送風や換気を徹底します。

(1) ルーメンアシドーシスに注意

蹄冠部に赤みがある場合は、アシドーシス（過剰な穀類給与、繊維不足によりルーメンが酸性化）を発症している可能性があるため、管理を見直します。ルーメンpHが下がると、微生物が死滅する際に発生したエンドトキシンにより角質の形成が減少して蹄壁にスジが現れ、蹄葉炎を発症するといわれています。

慢性的なルーメンアシドーシスの回避のため、飲水量の確保、良質粗飼料の給与、デンプン濃度の調整、重曹、ビタミン類の補強などを再確認します。

(2) 定期的な削蹄

牛の蹄は月に5mm伸びると言われます。蹄が伸びすぎると加重位置が変わり、血流が悪化し蹄の角質がもろくなり、細菌感染を引き起こします。蹄骨などの深い部分にまで感染が広がり蹄底潰瘍となります。

年に1～2回、乾乳期や泌乳ピーク後をめどに削蹄を行います。起立した姿勢、歩行時の状態をよく観察し、問題がある場合は、早めに獣医師や削蹄師に処置を依頼します。

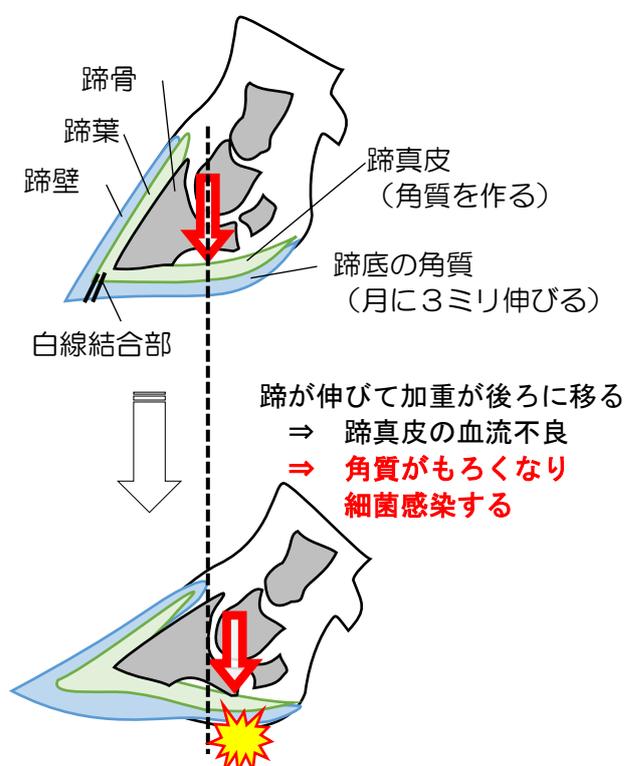


図1 蹄底潰瘍の機序

4 子牛の管理

9月下旬から夜間は13℃を下回るようになり、子牛は寒い夜を過ごしています。哺乳期の子牛は、体熱がうまく作れない時期なので、防寒対策を行い、子牛にとって快適な温度「13～25℃」を目指します。

乾いた敷料（ワラなど）を、寝てほしい場所にたっぷり入れる、糞尿で汚れた敷料は、毎日除去して牛体をぬらさない、バスマットを敷く、寝床はL型に2方向の壁を設置する、空の洗剤ボトルなどで湯たんぽを作って寝床に入れます。



バスマットが、床からの冷気を遮断



図2 防寒対策：バスマット敷設

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 特別号 ツキノワグマ対策

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 基本 本 まもる・よせつけない・つかまえる 3つの基本対策を総合的に！
- ◆ 刈払いの実施を 刈払い等によりツキノワグマにとって快適な環境を無くしましょう
- ◆ 食べさせない 食べ物を排除するとともに、電気柵を確実に設置運用しましょう
- ◆ 電気柵点検 地面と平行に隙間なく、正しい高さで設置されているか点検を
- ◆ 恒久電気柵 支柱・ワイヤーとも一定の強度があるので活用を検討しましょう

1 基本

県では、令和7年7月4日にツキノワグマによる死亡事故が発生したことを踏まえ、出没に対する注意喚起を強化し更なる被害の防止を図るため、岩手県全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表しています。また、林野庁の調査によると、今秋のブナ結実の豊凶は、本県を含めた東北5県で大凶作と推測されています。

ツキノワグマは今後、冬眠のために餌を大量に食べる時期を迎え、本来、ブナやクルミ、ドングリなどを求めて活発に活動し、皮下脂肪を蓄えて体力をつける時期となります。そのため、そうしたエサが確保できない、または、人間社会の近くで生活したほうが、高カロリーのエサが確保しやすいと判断した場合には、私たちの生活や農業生産の現場に出没することも考えられます。

野生獣による農作物被害対策の基本は、「個体群管理＝つかまえる」「侵入防止対策＝まもる」「生息環境管理＝よせつけない」の3つの基本的対策を、地域やほ場で総合的に継続実施することです。

捕獲・駆除だけでは、次の個体群がやってきて、また被害が発生します。捕獲することは基本対策として重要ですが（特に加害獣）、それだけでは被害を無くすことはできません。3つの基本対策を総合的に実施することが最も重要です。

2 刈払いの実施を！

- ポイント 草刈等で近づけさせない！
- ・ほ場や集落、河川付近の茂みや耕作放棄地は、ツキノワグマをはじめとした野生獣の格好の潜み場、休憩場となります。
- ・「草を刈る」ことは、見通しを良くすることになり、ツキノワグマの姿を見せると同時に、休憩場所を無くすこととなります。
- ・また、草刈りは最大の防御策である「電気柵」の効果をあげることにもつながり、効果的な対策です。
- ・車庫や倉庫、物置、廃屋なども点検し、住处や冬眠場所になっていないか確認します。

3 食べさせない対策を！

- ポイント 「エサ場」をなくし、かつ、誘因もしないように！
- ・畑の農作物はもちろん、未出荷の収穫済み農作物や、収穫残さ、捨てサイレージ（牛の飼料）、収穫しない果実、生ゴミ（コンポスト等を含みます）、家庭菜園等、身のまわりの思わぬものがツキノワグマを引き寄せるエサとなります（写真1）。

- ・農作物は植えると同時に、食べさせない対策を実施します。小さな面積であっても、電気柵の設置を検討し、ツキノワグマにそこがエサ場だと認識されないよう、しっかりと防御します。
- ・ツキノワグマを引き寄せないよう、コメや生ごみ（コンポストを含む）なども、極力屋外で保存しないことや、小規模のものは密閉する等「匂いを出さない」対策を行いつつ、倉庫等の施錠と戸締りを確実に実施するなど「侵入されない対策」を実行します。



写真1 人間にはゴミでも野生獣には御馳走です

- ・畜舎は、家畜の（配合）飼料はそのままツキノワグマのエサになってしまうため、畜舎周りへの電気柵設置を検討します。舗装されている場合は、電気を通しづらく電気柵の効果が低下することから、その外周への設置を検討します。

4 効果的な電気柵の設置と点検を

電気柵は、ツキノワグマ等野生動物に、痛みを与えて防御できる唯一の方策です。

設置やその後の運用に際しては、以下の点に注意しましょう。

- ・ワイヤーの高さは正しく（地面から20,40,70cm）、ピンと張ってください。ポリワイヤーを利用している場合には、「簡易緊張具」の利用が便利です。また、その際、ワイヤーのスタート・ゴール以外は途中で結ばないでくと、クマの強行突破の際も他の支柱を引っ張らないため、破損が少なくなります（写真2）。
- ・地面が盛り上がったところや、くぼ地には支柱を追加し、ワイヤーの高さが地面から均一になるよう調整して、漏電と隙間からの侵入を防ぎます。
- ・パワーユニットは、設置距離に対応したジュール数のものを選択し、アース棒もパワーユニットに対応した本数と深さで設置します。電圧は5,000V以上、稼働後でワイヤーが草に触れている状態であっても4,000V以上の電圧が流れているかを確認します。
- ・適切に電気柵を設置していても、なお、侵入が見られる場合、ツキノワグマは最下段と地面の間や、ワイヤー間をくぐり抜けていることが多いため、ワイヤーを下げることを検討してください。



写真2 ピンと張られたポリワイヤーによる電気柵



写真3 クマ対策の簡易電気柵とトリップ柵

- ・また、トリップ柵と呼ぶ、本柵の外側 30cm の位置に、1 段だけワイヤーを追加設置する方法もあります（高さ 20cm、支柱は 1 本飛ばしでも大丈夫です）。クマはこのトリップ柵に対し、またぐことはほとんどなく、侵入防止効果を高めることとなります。

5 恒久電気柵の利用も検討と点検を

- ・ポリワイヤーを利用した「簡易電気柵」は、設置が容易な反面、毎年設置と撤収を繰り返す必要があります。また、物理的にも強いとは言えません。また、毎年、設置を行う必要があります。稼働開始が遅れてしまう事例も少なくありません。
- ・一方、単管パイプと高張力鋼線（フェンシングワイヤー）を用いる「恒久電気柵」は物理的な強度もあり、そのワイヤーは通電性も良く、ツキノワグマ対策に適した電気柵であるともいえます。
- ・設置についての詳細は、令和 7 年 5 月 29 日及び 6 月 26 日発行の「農作物技術情報特別号 野生獣対策(1)及び(2)」を参照ください。



写真 4 河川と農地の間に設置された恒久電気柵

- ・なお、恒久電気柵は、支柱間隔も長く、地面とワイヤーの隙間が生じやすい、といった特徴もあります。定期的に点検を行い、地面とワイヤーの間に過度の隙間が生じている場合には、^{がいし} 碍子の位置を修正しワイヤーを下げるほか、全体的にワイヤーが高い場合には、適切な高さのワイヤーの追加設置、または、一部分だけポリワイヤーを追加する等の対応を行います。
- ・ツキノワグマは、繁茂した草等により見通しの悪くなった川沿いを移動している場合が多くありますので、河川と農地や集落の間に、バリエードのように恒久電気柵を設置することも効果的です（写真 4）。長距離設置に対応し、毎年の設置撤収が不要な恒久電気柵は、こうした場合にも適しています。

6 おわりに

ツキノワグマを含め野生獣の対策としては、3つの基本対策を同時に実施する総合対策の実行が重要です。また、ツキノワグマを対象とした場合の防御策としては「電気柵」しかないことから、電気柵の適正な運用を検討してください。

なお、設置済み電気柵の点検や、次年度にむけ、集落単位やほ場における電気柵の設置を計画している場合などの野生獣被害対策についても、各農業改良普及センターでは支援を行っていますので、適宜ご相談ください。

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。